

一家四人がこの桃源にありて、大平の夢を見て居らるゝかと思ふと、人間といふ動物の處世を考へねばならぬ、吾等の生涯は、意義ある如くしかも意義は認めない、名奔利走の巷が人間の生涯する處であるか、暫く忘れて居つた人生問題を又茲に持ち出さなくてはならぬ、考ひは三年前の田園生活に及んだ、余が田園は、田園には相違無いが、隣もあれば町もある、余が田園と都とは只大小の差があるのみで、この田園とは趣きが違つて居る、余も内地に歸るのは止めて、このあたりを開拓し、蔬菜園の主となつて桃源の生涯を恣にせんか。とまで考ひこむと、杪櫨の澤のあたりより、馬鹿め馬鹿めと、何鳥か鳴き出した。暫く夢の人となつたが、自分に立歸ると夕日は山に近いて居る。境浦行きの道を尋ねてこゝを辭すと、主は五六丁も余を案内して境浦の見える處で別れた。この島に栖める人々は皆一族の如く、何れも親切である。甘蔗畑の急阪を下るとそこが境浦である、こゝに便船を得て宿に歸つた。

残雪

汀

鷗

△五月五日夜、上野十時發の汽車にて信濃柏原に向ふ、信越國境嶺の残雪を寫さんとてなり。

△六日、汽車碓氷を過ぐるころ東の方白みそめぬ、木々の新しき緑のうちに淡紫の山躑躅を見る、輕井澤春おそく櫻はつかに蕾

を破れるのみ、山に班雪あり。地は霜を結べり。

△上田長野の邊や、初夏の感あり、桃季色褪せて八重櫻時を得顔なり。

△朝八時柏原に着く、一里にして野尻湖に達し湖畔野尻館に投ず、館といふもたゞ二室を有するのみ。湖岸樹木乏しく景佳ならされど、妙高、黒姫、飯綱の高峰湖面を壓して聳え風光雄大なり。

△七日、關川、田口を過ぎ越後關山、岡本に泊る。田口邊、春酣にして、梅、櫻、桃、李、白蓮、棠花、水仙、蒲公英、すみれ等一時に開きて美はし、空には霞滿ちくく山影朧ろなり。

△八日、關山より二里、妙高山腹關の湯へゆく、林を過ぎ荒原を遡る、一里にして雪をふむ、厚さ尺余、山蔭はなほ三四尺の深さあり。浴舎富山屋に宿る待遇懇切なり。

△九日、關の湯を去り、途々寫生して、關山より汽車にて柏原に歸りふじのやに投ず。

△十日、朝近傍の小景を寫す、雨ふり來りしをもて正午の汽車に投し深更歸京す。

△此行稀なる晴れ續きにて、スケッチを得ること十八枚、山の雪や、多きに過ぎしも、里は百花の爛漫たるありて、はからずも春の繪の幾枚かを得しを喜ぶ。